

東北 DECADE

復興レポート

Vol.2

道はつなぐ 陸と海を 現在と未来を 復興道路全線開通へラストスパーク

二〇一一年三月十一日の東日本大震災から一〇年、発災直後から東北の復興をリードしてきた「復興道路」「復興支援道路」の全線開通が目前に迫っている。道がなければ何も始まらない。国は二〇一一年の年末までに補正予算を成立させ、宮城県の仙台から青森県の八戸を縦貫する三陸沿岸道路三五九キロメートルを復興道路として、宮古盛岡横断道路、東北横断自動車道釜石秋田線、東北中央自動車道を復興支援道路として事業化し、集中的に整備を進めてきた。その全長約五七〇キロメートルの道路網が二〇二一年中に全線開通する見込みだ。

建設業界が全力を挙げて取り組んできた未曾有のプロジェクト。ゴールはすぐそこだ。その経緯を概観しながら、ネットワーク沿線の町を訪ねた。真新しい道路の先に希望の光と新たな扉が見えてくる。

物流、医療、観光を
強力にサポートする

東日本大震災が発生した際、東北の太平洋沿岸部は津波により壊滅的な状況に陥り、南北を縦貫する主要道路が寸断された。いち早く動いたのは建設業界だった。余震や津波の再来襲が懸念されるなか、内陸部のかろうじて被災を免れた道を探しながら縦走。そこから東へ向けおびただし瓦礫を退け、幾本もの救援ルートを啓開した。「くしの歯作戦」。主に国道四号線から延びる啓開道路がくしのように見えたことからそう呼ばれた。

道路はまさしく東北の復興を震災直後から支え続けてきた。復興道路、復興支援道路はその象徴として整備されている。

三陸沿岸道路は二〇二〇年末までに約八五%が供用されている。この道路が開通すると、仙台〜宮古間が約三時間半、宮古〜八戸間が約二時間となり、これまで八時間半かかっていた仙台〜八戸間の所要時間は三時間以上も短縮される。顕著な効果は物流の効率化だ。岩手県の

2013年



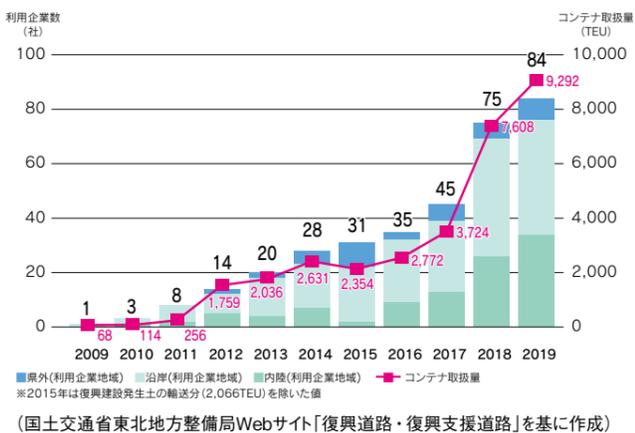
2015年



道をつなぎ、復興を支える

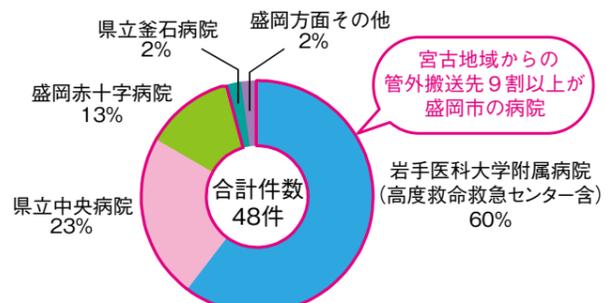
2013年1月号(上)で本誌が訪れたのは、岩手県大船渡市にある三陸沿岸道路・吉浜道路の建設現場。大船渡市越喜来(おきらい)から吉浜を結ぶ3.6kmの自動車専用道路だ。早期の道路開通を目指して懸命な作業が続いていた。2015年1月号(下2点)では、宮古盛岡横断道路・新区界トンネルの建設現場をたずねた。「道路の復旧がすべてではないが、『道』がなければ何も始めることができない」と語った所長の言葉が心に残る。

釜石港利用企業数・コンテナ取扱量の推移 資料:釜石市



(国土交通省東北地方整備局Webサイト「復興道路・復興支援道路」を基に作成)

宮古市内国道106号線沿線地域の宮古地区外への冬期搬送状況



※国道106号沿線地域
宮古消防署・新里分署・川井分署
冬期: H31.1~3月、R1.11~12月
資料: 宮古地区広域行政組合消防本部搬送実績

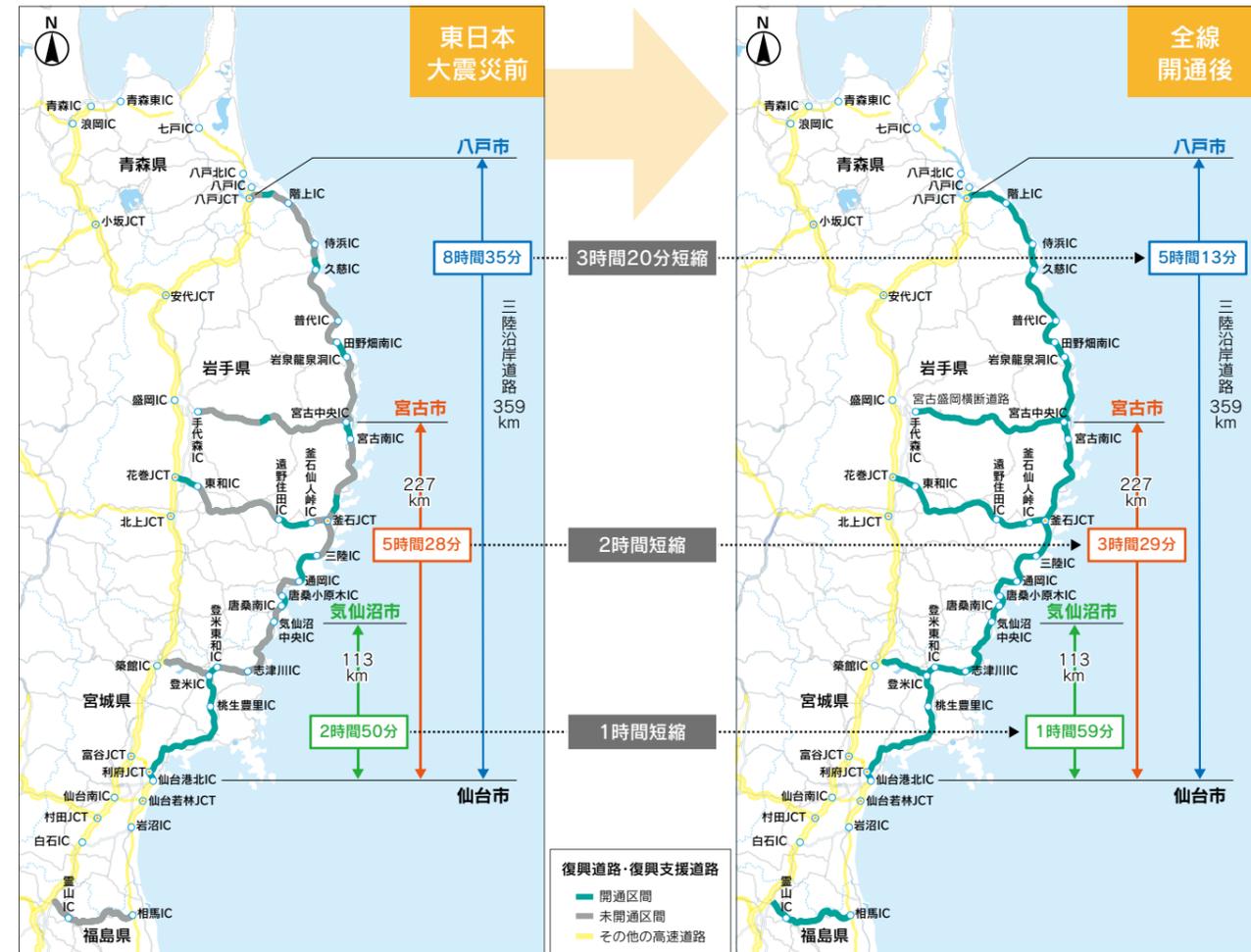
(国土交通省東北地方整備局岩手河川国道事務所発表資料を基に作成)

その「早く」を達成するため、関係機関の調整業務や進行管理を発注者と民間技術者がチームを結成して協働するPPP(パブリック・プライベート・パートナーシップ)方式や、発注者が事業計画の立案と基本設計を行い、施工者がその

二〇二一年三月で、震災から一〇年が経過する。復興道路、復興支援道路の沿線で挑戦を続ける東北の町々を訪ねると、幾つもの再生の萌芽と出逢うことができた。

遠されがちだった。横断道路は冬でも内陸と沿岸の観光流動を活性化させるものとして期待されている。「一日でも早く」を実現する建設業界の挑戦と矜持

後の調査、実施設計、施工を一括して担うCM(コンストラクション・マネジメント)方式といった新しい事業スキームにも取り組んだ。果敢に挑戦した展開手法が、劇的にも言える短期施工を実現したことは確かだろう。



(国土交通省東北地方整備局Webサイト「復興道路・復興支援道路」を基に作成)

また、救急医療施設への搬送時間が大幅に短縮され、災害時には寸断された沿岸部の国道の代替路となり、被災地へのアクセスが向上する。三陸沿岸道路は救命救助、被災時の復旧活動の要路になる。

故が頻発する区界峠を回避し、安定した走行を実現する。特筆すべきは三陸沿岸道路と同様、救急搬送機能の向上だ。現状の国道一〇六号線沿線地域の救急搬送では、実に約九割の管外搬送先を盛岡市が占めている。宮古市から盛岡市の岩手医科大学附属病院へ、開通前には一二七分かかっていた所要時間が、全線開通後には八七分になる。一刻を争う状況で約四〇分の時間短縮は大きい。また、宮古と盛岡は多くの観光スポットを有するが、冬季はこの両拠点を合わせて訪問することは、悪路を走行する必要もあり敬

釜石港を利用する企業の数やコンテナの取扱量は過去最多を記録した。輸送時間の短縮、効率化だけではなく、道路の高機能化に比例して水産物等の品質向上も図られる。



2020年12月、試験的にライトアップされた気仙沼湾横断橋(撮影:西山芳一)

宮古市



復興の軌跡を辿り 東北の今を知る

拓かれた道路を前へ 次のステージへ進む



内陸を結ぶ
最難関が開通

二〇二〇年末、岩手県の盛岡市と宮古市を東西に結ぶ国道一〇六号線の八キロメートルに及ぶ区界道路が開通した。整備が佳境を迎えている宮古盛岡横断道路の最難関と言われている区間で、二〇一一年から復興支援道路として国が直轄代行で進めてきた自動車専用道路だ。国道一〇六号線の区界峠は五％超の急勾配が七カ所、急カーブが二一カ所という難所だった。本誌でも過去に何度かこのエリアを取材で訪れているが、この蛇行する道路を走るたびに少なからず体力を奪われた記憶がある。しかし、宮古と盛岡を結ぶルートはこの道路しかなかった。

この峠を越える新しいルートが、四、九九八メートルの新区界トンネルと一、五七六メートルの築川トンネルだ。ピカピカの新設道路を走ってみた。ルートを直線化したことでその距離を四・八キロメートル、時間にして八分ほど短縮することができる。勾配も四％に軽減され、盛岡方面から走

るとわずかに登坂している感覚があるもののほとんど気にならない。かつての蛇行を思うと隔世の感がある。

六年ほど前に岩手県内最長の新区界トンネルの現場を取材した際、所長はこう語っていた。「道路は血管のようなもの。そこに人流と物流という健康な血液を通す。その目的を果たすため、全国から多彩な技術を持つ職人さんたちが集結しました。この現場からは東北復興に携わる意気込みが伝わってきます」。

宮古盛岡横断道路は二〇二〇年度内の全線開通を目指して整備が進められている。建設業界の「意気込み」が実を結ぶ日は近い。

宮古の活気が息づく 町の台所

二〇一八年に完成した宮古市庁舎一階の市民交流センターの一角に防災プラザがある。写真パネルやデジタルサイネージ、模型などで震災の記憶を留める。防災・減災に向けた意識の喚起を目的とした施設だ。明るくて静かな空間のなかで、

来庁者が時折足を止めて展示物に目を落としていた。

打って変わって賑やかな空気に満ちているのが、庁舎から徒歩七、八分の所にある「宮古市魚菜市场」だ。この宮古の台所には多くの観光客も足を運ぶ。買った食材をその場で焼きながら食べることもできる魚菜広場が人気だ。二〇一九年の春にリニューアルオープンしたが、場内の中央に設けられた生産者売り場のおばちゃんたちが振りまく元気はそのままであった。



宮古市庁舎ロビーの防災プラザ。クイズスタイルなどの工夫を凝らした展示が特徴的だ。

待望の道がつながる 新区界トンネル

岩手県内陸部の盛岡市、沿岸部の宮古市には観光資源が集中する。両市を結ぶ観光動線がこの宮古盛岡横断道路だ。年々増加傾向にある木材を出荷する産業道路としても欠かせないルートになる。救急搬送においても大幅な時間短縮を実現すると同時に、急勾配、急カーブを走らざるを得なかった救急車も、より安定した走行が可能となる。宮古盛岡横断道路は命をつなぐ道でもある。



宮古盛岡横断道路は全線開通間近。各所で最後の仕上げが急ピッチで進んでいた。



賑わいを見せる 宮古市魚菜市场

地元密着型の市場は元気な声が飛び交う。春には花見かきや山菜、夏から秋は生うに、松茸。冬は名産の新巻鮭。三陸の山海で獲れた自慢の食材を並べ、来場者を温かく迎えてくれる。



2020年

スタートラインに立つ市街 新たなコミュニティが生まれる

防災集団移転促進事業として森林を伐採し、山を切り、大規模な高台造成が行われた三王団地。2015年から住宅の建築が可能となった。現在はほぼすべての区画が引き渡され、約160戸の住宅が建ち並ぶ。ここでも新しいコミュニティが生まれつつある。

2016年



本誌2016年1月号より(取材は2015年)

田老地区

新しい海の防壁で町を守る

かつてはX字型の「万里の長城」と呼ばれた二重の防潮堤が田老の町を守っていた。しかし、世界でも類を見ないこの長城が、東日本大震災の津波で崩壊。真新しい防潮堤の傍らに壊れた防潮堤の跡が残っていた。震災遺構に指定された「たろう観光ホテル」が見守るなか、復旧工事が最終段階を迎えている。



2階部分まで完全に流出した「たろう観光ホテル」が新しい防潮堤を見守る。



田老を護ってきたかつての防潮堤の跡

町の「目玉」を発信したい

間もなく完全復旧する宮古市田老地区の防潮堤の後背地には、町の拠点となる「道の駅たろう」がある。二〇〇八年四月に本格オープンした施設で、地元産品の直売所や食堂、コンビニエンスストア、ドッグランなどが入居する田老地区の復興のシンボルだ。ここで出会った宮古市田老総合事務所の山本千香さんにお話を伺った。「田老の賑わいは戻りつつありますが、まだまだ途上です。でも田老はポテンシャルが非常に高いところなんです。その魅力をい



道の駅たろう

なりわいと地域の 更なる再建を

道の駅の正面で懐かしい人と会うことができた。田中菓子舗の主人、田中和七さんだ。五年前、プレハブの仮設商店街「たろちゃんハウス」を訪ねた時は、ようやく沿岸部の新しい店舗の建設エリアが整備され、「本設店舗は未来への足掛かりになる」と破顔したことを思い出す。しかし、当時の心持ちをこう明かす。「具体的な立地や住所も決まっておらず、資金的にもとても厳しかった

かに伝えるか、発信力が求められています」。宮古盛岡横断道路など基幹道路の開通に期待を寄せる一方で、田老からの人の流出にも気を配る必要があると話す。「田老の『目玉』になる何かを探さなければいけません。今後は地引網漁などの体験型のイベントや、埋もれている観光資源の掘り起こしなどにも力を入れていきたいですね」。道の駅、町の拠点というハード面が整備された。今後は田老の魅力、情報発信というソフト面の強化がテーマになる。

宮古市 田老総合事務所 地域振興課 山本 千香 さん

かつては横浜に住だったが、ボランティアを機に田老に惚れ込み、昨年移住した山本さん。「三陸沿岸道路や宮古盛岡横断道路の開通、道の駅の開業などインフラの整備が進んでいます。田老をこの地域、東北の交流拠点にしようと頑張っています。昨年の台風やコロナ禍さえもバネにして田老の魅力を発信していきたいと話す。



です。希望を失いかけていた頃でもありました」。それでも前を向いた。「新しい区画で場所が決まり、再建という目的が明確になるにつれ、前に進むことができました」。新しい店舗は二年前前にオープン。自慢の「田老かりんとう」の人氣は変わらない。「これまで続けてきた仮設商店組合は震災から一〇年を目前に新たな方向性を模索しています。それは新しいコミュニティをこの地で創つていこうという試みでもあります」と、田中さんは温かく笑いながら話してくれた。



田中菓子舗 田中 和七さん

田中菓子舗の田中和七さんと奥様の和気子さん。変わらない笑顔が嬉しい。震災前は3店舗あったが、この店が新たな出発点になる。「うちももう少しで創業100年です。その時は何か区切りになることをやってみたいと色々考えているところですよ」と話す。愛娘も店を切り盛りするようになり、元気な笑顔を見せている。



女川町

復興を果たした
まちの玄関

宮城県みやぎの女川おんながわは復興まちづくりのお手本とも言われている。女川駅前商業エリアは観光客から地元市民、社会科学見学の学生服の中学生たちで賑わいを見せている。

真新しい女川駅はJR石巻線の終着駅だ。かつては海から二〇〇メートルほどの地点にあったが、震災後に高台へ移転した。二〇一五年三月には駅周辺の「まちびらき」に合わせ、ターミナルとしての再建を果たした。

駅舎は建築家の坂茂氏の設計による。町鳥であるウミネコの羽ばたきをイメージした大屋根が印象的だ。駅舎内には温泉施設「女川温泉ゆぽっぽ」があり、旅の疲れを癒してくれる。

賑わいのなかに
震災の記憶

駅から海側にはテナント型商業施設「シーパルピア女川」が伸びる。解放感に満ちたレンガ道沿いにはミニスーパーや観光施設、飲食店、工房などが出店している。両サイドの店舗をつぶさに見ていると、すぐ近くの漁港で揚がった魚介や農産品など女川ならではの物産を積極的にアピールしようとする各店舗の想いが伝わってくる。

シーパルピア女川とその先の漁港の間には、横倒しになった建物がある。震災遺構として保存されることになった旧女川交番だ。



賑わいをつなぐ シーパルピア女川

高台に移転した住宅エリアと女川駅、中心街をつなぐように女川町新庁舎が建設された。「シーパルピア女川」は週末ともなると多くの来訪者で活況を呈する。被災当時の小学生が詠んだ「女川は流されたのでない 生まれ変わるんだ」という詩に込められた想いが、現実のものになろうとしている。

一九七八年に建てられたRC造二階建てが完全に横転し、基礎杭が水平方向に露出している。文字通り根こそぎ津波に倒された状況がわかる。多くの来訪者で賑わう商業施設の隣でこれからも震災の記憶を生々しく留め続ける貴重な遺構だ。

生まれ変わった
女川の顔

改めて山側に目を向けると、高台の住宅地と海側の商業施設をつなぐ立地に女川町役場が見える。かつて本誌が訪れた際の庁舎は、小学校の駐車場に建てられたプレハブの仮設庁舎だったことを思い

出す。

二〇一八年九月に完成した新庁舎は地上三階、地下一階のS造で、被災した生涯学習センター、保健センター、子育て支援センターを集約した。子ども向けの図書館「ちゃっこい絵本館」と一般向けの「女川つながる図書館」も新設された。約四五、〇〇〇冊の蔵書のうち八割は全国から寄贈されたものだという。

庁舎の再建を担った施工会社は、設計に当たり庁舎の機能、用途ごとに分節した機能ゾーンを、女川湾の眺望を重視して配置、構成したという。見上げる庁舎の雄姿はまさしく女川復興のシンボルとも言える庁舎だ。



旧女川交番



刻まれる想いと教訓
女川いのちの石碑

震災直後に旧女川第一中学校の生徒と地域住民が協働し、沿岸部に設置した石碑は全21基。「ここは、津波が到達した地点なので、絶対に移動させないでください」と刻まれたメッセージに切実な想いがにじむ。震災の教訓を「1000年先まで」残そうとする強い意志が伝わってきた。

2020年



北西上空より女川町中心部を臨む

CM方式による市街地の復興

女川では、国内初となるCM方式を取り入れた「女川町震災復興事業」により、宅地造成、区画整理などが行われた。東日本大震災から3年を迎える直前、2014年3月号で本誌が訪れた女川は造成工事の真っただ中。右上の誌面内、中央から左奥に向かって続くスロープの先が、現在、女川町新庁舎が建つ場所だ。時折雪が舞う中、行き来する重機を背景に取材に応じてくれた現場所長は「町の期待に必ず応えたい」と力を込めていた。それから1年後、2015年3月の女川駅開業を皮切りに、造成された土地に新庁舎や商業施設、住宅が次々と建設され、新たな市街地が形成された。



JR 石巻線の女川駅ホーム



JR 女川駅・女川温泉ゆぽっぽ



女川町新庁舎

2014年



2011.3.11
2014.3.11
東日本大震災から三年



河口部の観光拠点に いしのまき元気市場

壊滅的な被害を受けた旧北上川の河口部は堤防整備計画により景観に配慮した憩いと交流の場として生まれ変わった。「いしのまき元気市場」は新鮮な魚介などを販売する店舗やフードコートが人気を集め、隣接する「かわまち交流センター」とともに石巻の観光拠点になっている。



いしのまき元気市場



震災から2週間経った頃に設置された「がんばろう!石巻」の看板。震災木材などで作成された。看板を作ったメンバーにより、この看板付近では定期的に様々なイベントが催されている。なお、現在の看板は2代目。

太平洋に突き出た
港湾の町・牡鹿

女川町の南に位置する石巻市の牡鹿エリア、鮎川港まで足を伸ばす。女川から蛇行する山道を車で南下すると二〇二〇年七月にオープンした「ホエールタウンおしか」の大屋根が見えてくる。捕鯨産業で隆盛を誇った鮎川の歴史を伝える展示施設「おしかホエールランド」、三陸復興国立公園と牡鹿半島エリアの自然や人々の暮らしを紹介する「牡鹿半島ビジターセンター」、飲食店や鯨歯工芸の店舗が outlet する観光物産交流施設「Cottu」からなる観光拠点だ。

この地区では地域再生拠点エリア

整備現場に隣接して震災伝承施設「南浜つなぐ館」がある。決して大規模な施設ではないが、館内には街並みの再現模型やパネルなど多種多様なコンテンツを、工夫を凝らして展示している。ここで震災の記憶を留める活動に取り組み(公社)3・11みらいサポートの阿部豊和氏は

石巻市街地南部の南浜地区では「石巻南浜津波復興祈念公園」の整備が佳境を迎えていた。約四〇鈔という広大な敷地。国と宮城県、石巻市の連携プロジェクトで、中心部には国営の追悼・祈念施設が整備される。一帯が市街化される前の湿地や樹林地を復元し、南浜の原風景を再現するとともに、震災前の街の記憶として街路の形を保存する計画だという。

整備事業として四・五鈔にわたって造成工事が行われた。生まれ変わった港湾部に新たな観光・交流拠点が整備され、まちづくりに一役買っている。

施設の整備建設が
目的ではない

ホエールタウンおしか



鮎川港



新たに生まれた出会いと交流・学びの場 ホエールタウンおしか

「ホエールタウンおしか」には、クジラの生態や特徴を学ぶ「おしかホエールランド」や、牡鹿の歴史、自然環境を紹介する「牡鹿半島ビジターセンター」などが入る。企画展やクラフト体験などを随時開催することでリピーターを増やしている。



整備の進む石巻南浜津波復興祈念公園を上空より望む

石巻市



記憶を収集・展示する 南浜つなぐ館

館内には、かつての街並みを再現した模型や思い出の品が展示され、また、震災遺構を体感するVRシステムから映像を自由に閲覧できるシアタールームが完備されている。新型コロナウイルスの影響で一部展示を休止しているものの、パネルや映像で石巻の過去と現在を知ることができる。後背地では石巻南浜津波復興祈念公園の整備が進む。

東松島市

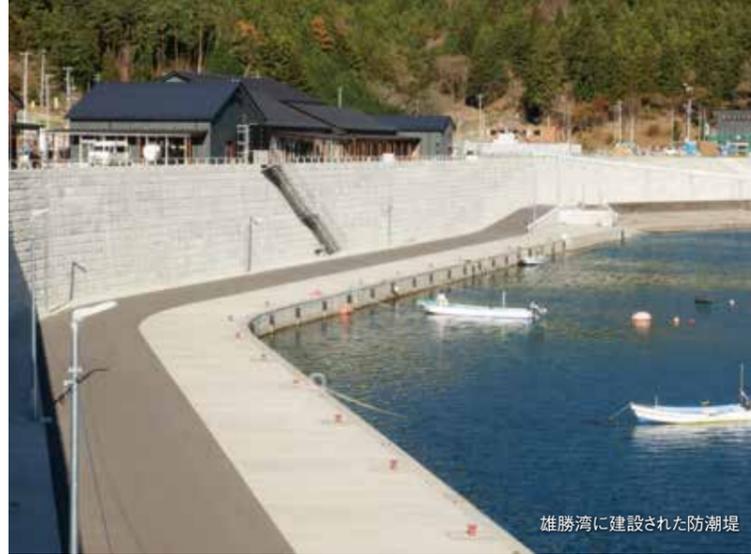
2017年



集団移転で進む新たなまちづくり

津波で大きな被害を受けた東松島市野蒜地区では野蒜北部の丘陵地を造成し、高台への集団移転を行っている。2017年2月号で訪れた野蒜地区には住宅が建ち始め、小学校も完成するなど、復興まちづくりが着実に進んでいた。

各地で進む 創造的復興 まちづくり



雄勝湾に建設された防潮堤



硯上の里おがつ



公益社団法人3.11みらいサポート 専務理事 中川 政治 さん

「伝承施設や公園を巡るだけでなく、語り部の言葉と心に触れることで、実体験に基づいた、よりリアルな東日本大震災、防災の重要性を知ることができます」といいます。

雄勝湾に建設された防潮堤と、硯上の里おがつ

雄勝町を護る防潮堤は既に完成。その壮大さに目を見張った。要塞のような強固な防壁から当時の町の葛藤が伝わってくる。その上には硯の展示館と商業施設がオープンした。防潮堤の壁面をキャンパスに見立て、アーティストが描く作品を展示、公開する防潮堤美術館のプロジェクトなども動き始めている。



野蒜築港跡



東松島市震災復興伝承館

津波の脅威を伝え続ける

JR仙石線の旧野蒜駅舎を改装した「東松島市震災復興伝承館」。津波警報の発報で2階のベランダから3階へ避難し命をつないだ市民がいた。その切迫した状況が、残された駅舎や券売機の展示から伝わってくる。近くではお雇い外国人ファン・ドールンの構想による明治期の野蒜築港跡に触れることもできる。

浜辺の災禍を 伝承する駅舎

仙台と石巻をつなぐJR仙石線も津波にのまれ大きな被害を被った。その甚大さが際立った陸前大塚駅、陸前小野駅間の復旧は、宮城県東松島市の復興まちづくりと一体で計画され、東名駅、野蒜駅を含む三・五キロが内陸側に付け替えられた。この大プロジェクトを経て仙石線は二〇一五年五月に全線開通を果たした。しかし、海岸に近いかつての野蒜駅の駅舎とホームは元あった場所に残されている。泥をかぶった券売機、折れ曲がった標識は、駅舎を改装した「東松島市震災復興伝承館」で触れることができる。開館は二〇一六年十月、これまでに延べ約一二五、〇〇〇人以上が来館したという。

新しい野蒜駅は山を崩して整備した高台に、住宅とともに移転した。被災地最大規模、海を見下ろすように造成された九二畝の野蒜団地には約一、二〇〇人が暮らす。その団地にも住宅街を貫くように真新しい道路が走っている。

「パネルや絵葉書、VRのアプリなども手弁当で整備してきました。ここに来ることで気付いていた話とかがたくさんあると思います」と話す。県外から多くの人が足を運んでくれるが、地元市民は多くはないと、こう言葉を継ぐ。「受けとめるにはまだまだ時間がかかるのかもしれない。市民の気持ちに配慮しながら、地域とともに将来へ向けて展示を拡充していきます」と話してくれた。

同法人の中川政治専務理事は震災伝承の意義をこう語る。「震災直後に石巻入りできたのは、道路の迅速な復旧に尽力いただいた皆様のお陰です。インフラや伝承施設の整備は必要条件の一つではありませんが、その整備の意義、有効性を真剣に考えながら地元へ寄り添った伝承活動に力を入れていきたいと思っています」。

中川専務理事は、伝承施設の整備後、語り部などのソフト面の取組みに目を向ける必要があると明かす。「今後は官民で未来に向けた協働体制を構築し、継続的に取り組むことが大きな課題になると思います」と、次の一〇年先を見据えていた。

復興を後押しする 町の護り手・防潮堤

石巻市街から北東方面、雄勝エリアに向かった。実に町全体の八割が津波により流出した地区だ。最大九・七メートルの防潮堤が三・五キロにわたり沿岸部を包囲する。五年ほど前の計画当時は観光資源ともいえる雄勝の景観を重視する住民と、インフラの整備や再建された工場など町を津波から護ることを第一に考える行政の間で議論が繰り返された。その防潮堤の上の高台に、オープン間もない観光拠点「硯上の里おがつ」がある。雄勝の特産品店や寿司店、カフェなどが軒を連ねる「おがつ・たなこや」、生産量全国一位を誇る硯に特化した展示施設「雄勝硯伝産業会館」が入居する。この日も大型バスで中学生たちが訪れていた。

内陸部から沿岸部に延びる復興支援道路、宮城、岩手、青森の三県を縦貫する復興道路、そこから毛細血管のように張り巡らされた道路を辿ることで多くの観光客、見学者をはじめとする人流の活性化が期待される。



「東松島市東日本大震災復興祈念公園」は、広場、旧野蒜駅を改修した震災復興伝承館、旧野蒜駅のプラットホームなどで構成される。広場につくられた、市内で犠牲となった1,109名の魂を鎮める慰霊碑の上には、来襲した津波の高さ3.7mを示すモニュメントがそびえる。

東北の太平洋沿岸部を走る道路は幹線道路に限らず、美しく新調されたような佇まいがあった。一〇年前、ここに瓦礫が山積し、車両はもろろ人の往来もままならなかった状況を想像する。そして今、道はつながり、更に面的に広がる東北の復興を担っていく。